

2023年2月14日

井上樹彦副会長 就任記者会見 会見要旨



1. 冒頭あいさつ

(井上副会長)

本日付でNHKの副会長に就任いたしました、井上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、NHK及びNHKグループの中で、報道、編成、経営、それから技術と、幅広い分野の業務を担当しまして、その一方で、関連会社等では民間放送や有料放送事業者との交渉や連携を通じまして、外から見たNHKということも非常に貴重な経験となりました。

こうした経験を活かして、稲葉会長が掲げます「改革の検証と発展」に向けて、会長を補佐するとともに、NHKが今後も公共的な役割を果たして、視聴者、国民の皆様にとって必要で不可欠な存在であり続けられますよう、全力で職務を遂行してまいります。

2. 質疑応答

(記者)副会長に任命されたことをどう受けとめているか。抱負は。

副会長の役割については、放送法の第51条の第2項に記されていまして、稲葉会長を補佐し、しっかり支えて、経営委員会、そしてNHKの役員、職員とともに、公共メディアNHKの経営に全力を尽くしたいと思っています。

稲葉会長が12月、それから1月に行った記者会見の要旨を私も読みました。その中で、放送の目的は、健全な民主主義の発達に資すること。受信料をいただいている国民の

信頼を得ること。そのために、NHKが情報の拠り所となり、また、質の高いコンテンツ、報道を制作、発信していくこと、その環境や組織をつくっていくことが大事だと言っています。私もまったくそのとおりだと思っています。

また、会長がこれからの自分の役割として掲げている「改革の検証と発展」を実現するためには、職員一人一人が持つ能力を最大限に発揮できる、そして、安心して、生き生きと職務が遂行できる、職務に専念できるような現場にすることだと、私は理解しております。

これからの経営にあたって、会長と私の考え方はまったく一致しています。NHKが今、抱えている危機感というものも共有できると考えています。くり返しになりますが、あらゆる面で会長を補佐するのが私の役割です。十分に意思を疎通し、会長を全力で支えるとともに、会長の考えを職員に伝えて、また現場の声を会長に伝えることも私の役割だと思っています。

(記者)今回の人事については、いつ頃、誰から、どのような形で話があったのか。

今回の任命の同意を経営委員会に諮られた稲葉会長から、最近になって打診がありました。

(記者)最近というのは、今日というわけではないか。

今日ではありません。今日より前に稲葉会長から打診があったということです。

(記者)NHKの理事や、NHK アイテック、放送衛星システムの社長などの経験を、どのように活かしていくのか。

私はもともと記者で、そのあと編成も経験して、放送の仕事を中心にやってきましたが、そのあと、その放送を支える側の経営、あるいは技術の仕事に携わってきました。このおよそ6年半は、地上波と衛星放送のインフラ、基盤を支える会社において、放送そのものがどうやって全国に届けられているかが非常によくわかりました。

特に放送衛星システムでは、NHKのみならず、民間放送、それから、有料放送事業者の方々との交渉や連携を経験し、非常に勉強になりました。放送業界全体が今、どういう状況にあるか。あるいは、NHKが外からどう見られているか。そういった視点も持つような経験をしました。これからはまたNHKの中で仕事をするようになりますが、NHKもメディアの激変の中で、大変困難な状況の中で、公共メディアとして進んでいくことになりますが、その価値は変わっていないと考えています。ぜひ、役職員と一緒に、この公共メディアの価値を忘れずに進んでいきたいと思っています。

(記者)先日、新聞協会のメディア開発委員会から、NHKの2023年度予算に対して、インターネットの事業費が200億円の上限に近い、過去最大の197億円で、肥大化が懸念されるという声明が出されました。

民間との連携に対して、どのように会長を支えていこうと、考えているか。

民放との二元体制を維持するという事は、会長も会見で言われていますし、この方針は、NHKにとっては変わらないものだと思います。日本のテレビ放送が始まって70年ですが、いろいろな意味で、二元体制がこれまで日本の放送の発展に寄与してきたと思っています。

私は放送の中身に関わってやってきたので、特に思うのですが、それぞれが経営体としては違っても、番組やコンテンツ、ニュースなどで、競争というか切磋琢磨というか、刺激を受けたり、あるいは勝ったり負けたり、あるいは、記者でいうと、ニュースの特ダネというのがありますし、そういった形でお互い高め合っていたという関係が非常によかつたのではないかと思います。

そういう意味では、新聞協会の見解も読みましたけれども、基本的には民放との二元体制と同様、新聞というの、これまでNHKと競争してきた、一緒に高め合ってきたメディアなので、これからは民放、新聞、公共放送、その他の出版のメディアも含めて、そういった多元的なメディアとか放送といったものが、民主主義にとっては不可欠なものだと思います。

NHKは、ネットの予算上限200億円の中で、放送とネットとの融合、ネットを活用する時代になってきているので、その範囲内でお互いに良い方向に高め合っていくといったことは必要ではないかと思います。

(記者)同じ新聞協会の見解の中で、公共放送、公共メディアとして、やはりあるべき姿というものを示すべきではないかと指摘がありました。公共放送のあり方の中身について、考えは。

報道、文化、教育など、見てもらう量を最優先に考えると、できない分野もあると思います。そこを公共放送、公共メディアがきちんと放送していく、国民に出していくという役割は以前からあると思います。ドキュメンタリー、あるいはエンターテインメントなど、こういったものは、より高い質の番組を出していく。やはり両方必要ではないかと思っています。もちろん、数字だけを求めない番組ができるのは、たぶんNHKだけでしょうし、有料放送にしても、ネット系のメディアにしても、どれぐらいの人が見ているかによって番組を増やしたり、減らしたりしますよね。それとNHKは一線を画せるわけですから、そうした数字に左右されない番組とかコンテンツは、言ってみればNHKの生命線というか、大事にしなければいけないところだと思います。それは、これからも変わらないのではないのでしょうか。

(記者)井上さんをはじめ、政治部経験者の副会長が続いているが、この現状をどうお考えになっているか。あと、政治との距離をどのように取っていくつもりか。

私は昭和55年にNHKに入り、長崎放送局に6年間いたあと政治部に移って、報道にいた間の3分の2は政治の取材をしていました。政治の取材といっても、外交だとか、そういった政治のど真ん中の取材だけではなく、それに加えて、この15年間ぐらいは、ほとんど政治取材からは仕事の面では離れていました。

編成局では、編成と営業との連携、経営部門では放送センターの建て替え、それから関連事業を担当しまして、そのあと最近の6年半は技術のインフラ会社にいました。私としては、政治部出身ですけれども、知っている人間もNHKの各セクションにいますし、とくにそこは意識を強く持っていません。

政治との距離についても、政治部長までやりましたので、距離感というのは、自分の仕事の中で体験しています。政治ニュースにおいて、あるいは、報道を出てからも、番組の開発や編成、技術の分野において、政治との関係で、何か力があって、それに応じたとか、それに屈したとか、そんな経験はありません。

それは、これまでのNHKのニュースとか番組を見ていただければ、いろいろな見方はありますが、そんなことで揺らぐようなNHKの放送の内容ではないと思います。だからこそ、これまでも、今も、NHKに対する、たとえばNHKのニュース等に対する信頼は高い。そうでなければ、信頼を失いますから。たとえば、政治からの干渉があったということであれば、とくに今の時代は一瞬のうちに国民の信頼を失い、公共放送は成り立ちません。そうしたことは、私の経験から言ってもないし、これからもあってはならないと強く思っています。

(記者)「NHKがどう外から見られているかという視点も持つような経験をした」と話していたが、具体的に、どのような視点を持ったのか。それを今後のNHKの改善にどう活かしていくか。

NHKに対する期待、評価ですね。例えばBSについては、NHKは今後BSの再編がありますが、一貫してBS放送をリードしてきたというか、はじめから中心になってきた。ここで、「より良いコンテンツを放送してほしい」という期待。それから、技術分野でいうと、デジタル化も含めてNHKの技術が先導してきた、それに対する期待。叱咤激励も含めて、NHKに対する期待の大きさが少しずつ、かつてほどではなくなっているという見方もありますが、私は外から見ていて、やはりこれは大きいなと感じました。

たとえば、制作者から見ても、NHKのBSの番組は、外部の制作者による非常にいい番組を出していますが、そういった番組制作者からすると、NHKの波は自分たちの作品を世に出す、非常に大きなツールだと。もちろん、今はネットもありますが、同時に、一気に日本の全国に送られるということへの期待はやはり大きい。

そういった期待が大きいということを、ぜひ、NHKの中で働く人たちにもわかってほしい、実感して仕事に取り組んでほしいと、外から見ていて、改めて思いました。自分

が中にいるときも、そう思っていたのですが、やはり外から見ると、まだまだNHKに対するそういった思いや期待は大きいと思います。

(記者)外から、前田前会長の改革をどう見ていたか。何が課題で、稲葉新会長とどう変えていくつもりなのか。

これについては、稲葉会長が会見で発言されたことと、まったく同じ思いです。非常に大胆な改革を行われたと思っています。もともと、NHKに対する改革への要請は以前からあって、そういったものに応えようと言われたのだと思います。

ただ、まだまだ改革は途上だと。しかも、改革の内容については、まだいろいろな意見があって、とくに改革の中で、値下げに伴う減収、収支のマイナスが発生する中で、どうコンテンツの質を維持していくかといったことなどは、まさにこれからの課題なので、ここは、向こう3年間、会長をしっかり支えて、改革の中身、それから、これからの方向について、十分支えながらやっていきたいと思っています。

(記者)福岡県のどちらの出身か。

久留米市です。

(記者)副会長になることを伝えられたときの率直な感想は。

稲葉会長の12月の内定会見、それから、1月の就任会見は、放送衛星システムの会社で、リアルタイムで見えていました。おっしゃることに非常に共鳴しました。とくに、「改革の検証と発展」のところは、NHKのコンテンツの質を高める、つまり、作る側がとにかく安心して制作に専念できるための取り組みなんだというところが、私自身もNHKにいた人間として、非常にありがたいなと思いました。

そこで共鳴しておりましたので、打診があったときに、こういうふうに捉えられている会長であれば、NHKにとっては、この会長を支える、この会長とともに歩んでいくべきだと、私はそのとき思いました。打診があったときにはもう、そういう気持ちでした。しっかり支えて、この方針をぜひ実現してほしいと思いました。

(記者)7年くらいNHK本体から離れていたが。

技術というか放送の基盤の会社を私は知りませんでした。それまでは、この神南から、TOC(テクニカルオペレーションセンター)から放送を出せば、もうすべての家庭に電波が届くものだと思っていました。報道にいたときにはNC(ニュースセンター)、編成にいたときにはTOCから指揮をして、これを出せ、あれを出せということで、そこから先のことは考えが及ばなかったんですよ。

ところが、その先に、BSで言えば放送衛星があって、その放送衛星を監視している人がいて、少しでも衛星が傾いたりしたら、それを立て直すのを四六時中やっているわけです。あるいは、地上波では、これはNHKアイテックという、今のNHKテクノロジーズの前身の会社ですが、地震などが起きたときには、最初に鉄塔やアンテナを立て直しにいくんですね。そういったことを私は知らなくて、その会社に行って初めてわかりました。

どれだけの労力が、放送に注ぎ込まれているかですね。放送を出したあとの縁の下の力持ちがわかったんです。それがわかると、それに値する放送を出してほしいと、ずっと思っていました。つまり、そうやって地上と衛星のネットワークを365日維持している会社において、それに見合うものというか、番組の質も、放送の質も上げてほしいと思いました。

今回、こういった形でNHK本体に戻ることになりましたが、その気持ちはたぶん、忘れないと思います。したがって、話は戻りますけども、稲葉会長の言う質の高いニュースや番組、コンテンツをとにかく最優先に出していく、そのための「改革の検証と発展」なんだと。そこにNHKの職員は専念してほしい。それが、外にいて一番感じたことではないかと思います。

(記者)NHK 本体に戻って仕事に携われるということは、ご自身の集大成になるという考えか。

そうですね。放送法に書いてある通り、私の第一の仕事は会長の補佐であり、会長とともに全体を見る役割ですが、放送、コンテンツの充実にとにかく全力を挙げてほしいと思います。そこに専念できるような環境をつくるのが経営陣の仕事だと思っています。

(以上)